

最優秀賞（全国大会・法務大臣賞）

星塚のじいちゃん

宮崎県立五ヶ瀬中等教育学校 3年

藤原 凜華

「星塚のじいちゃんと言ってくれ」かつて、「私にさわらない方がいい」と言って握手を拒んだあなたがそう言ってくれた時、本当にうれしかった。あの時私たちは本当の家族になれたのだ。

私には、キティちゃんと阪神タイガースが好きなどってもおちゃめなおじいちゃんがいる。彼とは血のつながりはないけれど、それ以上の絆を感じられるすてきな人だ。私は、おじいちゃんに年一回会えるのをいつも楽しみにしている。そのおじいちゃんが暮らしているのは、鹿児島県にある国立療養所星塚敬愛園。そう、おじいちゃんは、国の非道な政策によって家族も故郷も自由に選ぶ人生もすべてうばわれた元ハンセン病患者である。

ハンセン病とは、らい菌に感染することで起きる病気だ。感染力はとても弱く、現代の日本で感染し発病することはほとんどない。しかし、有効な治療法や薬がなかった時代には、顔や手足が変形するというような外見に症状が表われてしまうことから忌避されてきた。また、感染を防止するには患者を隔離する以外にないとも考えられていた。日本では、一九三一年の癩予防法によってハンセン病患者をハンセン病療養所に強制的に入所させ一生に渡って世間から隔離する政策を行っていた。それだけでなく子どもを持たせたり、患者の出た家を消毒したり、無らい県運動を進めるなどしてハンセン病は恐ろしい不治の病という誤った認識を国民に植え付けた。この政策のために、治療薬ができ、ハンセン病が治る病気だとわかった後も、ハンセン病患者やその家族は極端な偏見と激しい差別に苦しむことになった。しかもこの政策が終ったのは一九九六年。そんなに古い話ではないのだ。かく言う私もおじいちゃんに出会うまで何も知らない人間だった。

私がハンセン病について知ったのは、今から五年前、宮崎県主催の「ふれあいハンセン病療養所訪問事業」に参加した時だ。鹿児島県にある国立療養所を訪問し、ハンセン病について正しく知ろうというプログラムだ。園での全体説明のあと、語り部として私たち家族の担当になったのがおじいちゃんだった。彼を見た時、正直私は言葉が出なかった。なぜかというとな彼は義眼をはめていて、手は爛れ、指がなかったのだ。それだけではなく、ちょっと怒っているような、話しかけにくい雰囲気ももっていたのでますます何を話していいのかわからなくなった。でも、帰るまぎわ、せめて仲良くなりたい気持ちをこめて握手を求めた。しかし、そんな私に彼は「私にさわらない方

がいい」と言って、パッと反射的に手をひっこめたのだ。私はその時、なぜ？と複雑で切ない気持ちになった。彼はもうすでに病気は治っている。なのになぜ、と。しかし、少し考えて、彼をそうさせたのは、これまで受けてきたすさまじい差別や偏見によって深く傷つき、その心の傷が行動に表われてしまうものだと思った。

私たち家族は、彼の心の傷を知り、彼という人の人生について知りたいと思い、今度は元ハンセン病患者のだれかではなく個人をたずねることにした。二度目にお会いした時は、過去の歴史を聞くのはもちろん、一緒に歌をうたったり、散策をしたりして打ちとけた時間を過ごすことができた。

それから私たち家族は、毎年おじいちゃんの所をたずねている。まるでお正月におじいちゃんおばあちゃんの待つ故郷に帰るように。

おじいちゃんはもともと誰かとコミュニケーションをとることが苦手な方で写真に写ることも嫌っていた。でも、私たち家族と交流するうちに少しずつ心を開いてくれた。今では、手紙や電話でやりとりしたりもするし、一緒に写真に写ってもくれる。その写真をかざってもくれる。また、私の中学受験のときには誰よりも合格を祈ってくれた。だから、おじいちゃんから「星塚のじいちゃんと言ってくれ」と言われた時は、私たちを実の子や孫のように思ってくれていることや安心して手をにぎってもいい相手として信頼してくれたのだと思えたのでうれしくてたまらなかった。

これまでのあまりに過酷な経験が彼につけた心の傷は消えることはないでしょう。失った時間や家族をとり戻すことはできないけれど、私たちと新しい時間を重ねることで、おじいちゃんの人生が少しでも笑って過ごせる時間になるようにしていきたいと思う。それは私たち家族にとってもかけがえのないすてきな時間になるでしょう。おじいちゃんが私にくれた喜びを私も家族もそれ以上の喜びにしておじいちゃんにこれからも返していきたい。

おじいちゃん、あなたに会えて本当によかった。